＜金子みすずの概略＞

大正末期から昭和初期の童謡詩人。西条八十から「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されたが早逝のためその作品は散逸し、幻の童謡詩人と語り継がれるばかりだった。

１９０３年（明治３６年）４月１１日　山口県生まれ

１９２６年（２３歳）で結婚するが、夫の浮気や家庭内のトラブルに苦しむ。

　　　　　　　　　　夫から詩作を禁じられ、離婚を迫られるが娘を守るために離婚はせず。

１９３０年（２６歳）　精神的に追い詰められ、娘の将来を案じながら服毒自殺。

＜金子みすずの作品抜粋＞

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 私と小鳥と鈴と | こだまでしょうか | 雪 |
| 私が両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが飛べる小鳥は私のように、地面を速くは走れない。私がからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のようにたくさんな唄は知らないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。 | 「遊ぼう」っていうと「遊ぼう」っていう。「馬鹿」っていうと「馬鹿」っていう。「もう遊ばない」っていうと「遊ばない」っていう。そうして、あとでさみしくなって、「ごめんね」っていうと「ごめんね」っていう。　こだまでしょうか、いいえ、誰でも。 | 誰も知らない野の果で青い小鳥が死にましたさむいさむいくれ方にそのなきがらを埋めよとてお空は雪を撒きましたふかくふかく音もなく人は知らねど人里の家もおともにたちましたしろいしろい被衣(かずき)着てやがてほのぼのあくる朝空はみごとに晴れましたあおくあおくうつくしく小さいきれいなたましいの神さまのお国へゆくみちをひろくひろくあけようと |
|  |  |  |